

日本作物学会第 234 回講演会 エクスカーション 「仙台湾岸震災農地の復興状況視察」に参加して

川崎通夫

(弘前大学農学生命科学部)

日本作物学会では、東日本大震災以後、多くの学会員がそれぞれの専門の立場から被災地における農業課題の解決に向けて思慮を重ね、活動を展開している。2012年9月10・11日に東北大学川内北キャンパスで開催された日本作物学会第234回講演会では、「東日本大震災からの農業再生と作物生産技術」と題したシンポジウムが行われ、これまでの震災復旧に関する取り組みや研究成果が紹介されるとともに、今後の対応などについても話し合われた。今回の講演会は被災地である仙台市で開催されたこともあり、エクスカーションとして「仙台湾岸震災農地の復興状況視察」が同月12日に実施された。仙台平野における沿岸地域は、東日本大震災における巨大な地震と津波により甚大な被害に見舞われた地域の1つである。この地域では、稲作を中心とした農業が広く行われていることから農地と農業関連施設も大きな被害を受けており、これらの復旧に向けた様々な事業が進められている。今回は、本学会のエクスカーションとしては参加者が多く(約100名)、本学会における被災地農業の現状や課題に対する関心の高さがうかがわれた。

当日朝にJR仙台駅西口のバス乗り場に集合し、大型バス3台に分乗して、仙台市の海岸方面へと向かった。沿岸地域へ近づくと、損壊した建築物が目につくようになり、津波の影響で作付けされていない田畑が広がっていった(第1図)。沿岸部の沿道には、瓦礫の山が点在し、

未だ復旧作業のために多くのトラックやショベルカーなどの重機が稼働していた(第2図)。海拔の低い仙台平野の沿岸地域では、農地などの浸水を防ぐために各所に排水機場が設置されている。一行は、まず、仙台市若林区荒浜に設置されている大堀排水機場を見学した(第3図)。先の大震災では、津波により多くの排水機場が損壊し、河川や海岸の堤防の損傷や瓦礫による水路閉塞によって、広範囲にわたり農地を含む低平地で浸水状態が長く続いたそうである。この大堀排水機場も津波により大きな被害に見舞われ、その周囲の状況も深刻であることが容易に認められた



第2図 仙台市沿岸地域における沿道。



第1図 仙台市郊外の農地。



第3図 大堀排水機場における見学風景。



第4図 大堀排水機場の周辺。



第5図 仙台市沿岸地域の住宅地の跡。



第6図 閉上排水機場の建屋。



第7図 耕谷地区大規模実証試験圃場における見学風景。

(第4図)。大堀排水機場を後にし、バスで塩釜亙理線を南下しながら、被害状況や作付け状況などについて見学した。沿道には、津波により甚大な被害を受けた住宅地(第5図)や荒れた農地などが目に付いた。しかしながら、沿岸部においても内陸寄りの地域では、水稻などの作付けが行われている農地も多く目に付いた。この一帯では、内陸の方から海岸へ向かって作付けを段階的に毎年広げていく計画であるとのことである。大震災から約1年半が経過しても、被災地ではまさに復旧の真ただ中にあることを、現地に来ることにより改めて実感させられた。さらに名取市方面へと向かい、バス車中から仙台市若林区に震災復興支援の一環として設置された株式会社サイゼリアの仙台トマト農場を見学した。この農場では、同社が借用した被災した水田の跡地を利用して大型ハウスが建てられ、土壌の塩分に左右されない水耕栽培でトマトが生産されている。このように被災地では、企業等の参入により被災地の雇用増加や競争力の高い農業の再生に向けた取り組みが行われていることをうかがえた。

つぎに、仙台市に隣接する名取市に入り、名取土地改良

区に設置されている閉上(ゆりあげ)排水機場を見学し、担当職員から同区管内における被害や復旧の状況について説明を受けた。この排水機場では、建屋2階の窓にまで達する津波が押し寄せ、排水ポンプなどが大きな被害を受けたとの説明を受けた(第6図)。この名取土地改良区では、津波により7割に相当する2,450 haの農地が壊滅的な被害を受け、5ヶ所の排水機場も甚大な被害に見舞われ、現在でも排水機場の修理や新規排水機場の増設などが進められている。津波により塩を含む海の砂や泥を被った農地の再生には、作物学的な視点からの対応は重要であるが、排水機場などの作物生産の場となる農地を支えるインフラの復旧がまずは不可欠であることを強く認識させられた。

お昼時となり、亙理町にあるレストランにおいて焼鮭の身といくらがご飯の上のせられた地元名物料理「はらこ飯」を多くの参加者が堪能した。

その後、名取市に戻り、農林水産省委託事業「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」の実施地である耕谷地区の大規模実証試験圃場を見学した(第7図)。この事業では、東日本大震災の被災地を早期に復興し、新たな食

料生産地域として再生するため、先端的な技術を駆使した大規模な実証研究が行われている。見学の際、この事業に参加している地元の農業生産法人の方から、この試験圃場の概要や被災してから今日までの状況やご苦労などについて貴重な話をいただいた。また、この試験圃場では、被災地農業における高付加価値化、低コスト化、農業経営多角化の戦略目標のもとに、①大区画圃場におけるプラウ耕乾田直播を核とした低コスト 2 年 3 作水田輪作体系の実証、②津波被災地の圃場環境に対応した中型機械の汎用利用による低コスト 3 年 4 作水田輪作体系の実証、③大規模水田農業における ICT (Information and Communication Technology) を活用した栽培管理および経営管理の支援技術の実証、④広畝成形播種方式による 2 年 3 作体系の実証などの試験が行われていることが紹介された。このような震災復興に向

けた研究や試験の現場を見る機会が得られ、多くの参加者にとって研究上有意義な見学になったと思われた。

このたびの視察をとおして、被災地にはまだ多くの農業課題が山積し、作物学分野の研究者への要望も多いことを改めて強く感じるとともに、今後も被災地復興に向けた継続的・発展的な対応が必要であると考えられた。見学後、仙台空港を経由して仙台駅に到着し、エクスカーションは終了となった。

このたび、たいへん有意義なエクスカーションを企画・運営して頂いた第 234 回講演会の國分 牧衛 運営委員長をはじめとする運営委員会の皆様および協力学生の諸氏、さらには各見学地で説明等を行っていただいた担当者各位に厚くお礼を申し上げます。最後に、被災地のご復興を心よりお祈り申し上げます。